

注目してみて、ただ冷酷に感じていた彼の見方が変わり、この作品がさらに面白く感じることができました。また、罪に苦しむ姿がハムレットよりも人間味があると感じたところもありました。この“Hamlet”という作品は奥が深く、様々な批評もされていてそれぞれ違った見方をしていますが、私は、クローディアスの心の動きを強調して演出してみるのも面白いと思いました。

(3) 愛憎の情念を基調として

原 田 真 弓

『ハムレット』は、母に向ける息子ハムレットの「オイディプス・コンプレックス」、クローディアスの先王ハムレットに向ける「カイン・コンプレックス」、そして、レイアーティーズのオフィーリアに向ける妹愛、ホレイショーとハムレットとを繋ぐ友愛、オフィーリアとハムレットの儂い恋愛、など他にも色々な愛憎の情念が基になっている。

もし、私が『ハムレット』を演出するのなら、オフィーリアのハムレットに対する恋を純粹、精錬潔白なものとして強調し、何処までもハムレットだけを一途に想い、優しさ故に父親に逆らえなかった、心弱き者としたい。オフィーリアとハムレットとの間に身体の繋がりがあったか無かったのかという論があるが、断じて無かったものとする。たとえば、現代版だからと言ってオフィーリアを今の流行りの少女にしてしまえば、オフィーリアの持つ純粹華麗な象徴的な美しさが損なわれてしまうからである。

オフィーリアはハムレットを誰よりも愛し、また、愛されていると信じていなければならない。そして、ハムレットから辛く当たられること

と、愛する父親を最愛のハムレットに殺されたことで心を病んでしまう。そうして、オフィーリアは狂気故に自ら川に身を横たえ死んでしまう。

オフィーリアの死に対するレイアーティーズの嘆きは激しく誰よりも悲しいものでなくてはならない。レイアーティーズのオフィーリアへの愛は恋人に対するものに匹敵するほど、あるいはそれ以上のものと、見る者を錯覚させるほどであるのが望ましい。オフィーリアを強く愛していたからこそ、彼女を狂気へと誘い、父親を殺したハムレットへの憎しみも一層強くなる。ハムレットの地位も人柄も名誉も何もかも関係なく、我を忘れるほどの怒りと、憎しみから、レイアーティーズはクロードディアスの悪の囁きに耳を傾けてしまう。

怒りや憎しみ、復讐といった類いの感情は、状況判断を冷静に下すことを妨げる。だからこそ、レイアーティーズが全身全霊でハムレットに決闘を申し込む時、レイアーティーズは髪を振り乱して、まるで鬼のような形相でハムレットに襲いかかるのが良い。クロードディアスの用意させた毒を塗った剣を手にする時も、王子を殺すことに脅え怯むのではなく、妹と父親の敵を果せる喜びに武者震いを起こすぐらいでは如何だろうか。そして、殺意の塊となったレイアーティーズの剣がハムレットの咽喉を目掛けて突き進み、後数ミリで搔っ切るという時に、ある筈のないオフィーリアの「ハムレット様…！」という声がレイアーティーズの耳に届き、レイアーティーズの動きを止める。躊躇い動きを止めたレイアーティーズにハムレットの一撃が入る。そこから先は傷を負った獣同然に二人の死闘が繰り広げられ、剣が替わりお互いに傷を負う。自分の撒いた種により自分の死期を悟ったレイアーティーズがそこで正気に返り、自らの過ちを悔いハムレットに許しを請うのも原文そのままが良いだろう。

一番問題で難しいのがハムレットの気持ちである。が、それは後に回

して、先にハムレットの母王妃であるが、彼女次第でハムレットの心が変わってしまうと言える。だから、敢えて私は王妃をクローディアスに誑かされたただの被害者とする。夫の先王ハムレットを失った哀しみに打ちひしがれる王妃はクローディアスの下心に満ちた優しさを見抜けぬ愚かな女として、その手を取り彼を王にしてしまう。王妃は常に控えめで、大人しいのが好ましい。下手に小煩く、クローディアスと戯れるようでは見る者の反感を買ってしまうからだ。そして、母を慕うハムレットのオフィーリアに対する愛を疑いのないものと見せる為にも、オフィーリアと王妃との間に幾つかの共通点がなくてはならない。そして、それ故に先王ハムレットと王妃との愛も偽りではなく、心から愛し合っていた、そして王妃が先王暗殺には関わっていなかったことの証明がされなくてはならない。恐らく、女の強かさや誠実さと言った類いのものであるべきだろう。

逆に、クローディアスを見る者が思わず殺意を抱いてしまうほどの腹黒さをその言動に滲ませているのが最も望ましい。自分に力があると思いついでいる時は威張り、踏ん反り返り、自分の命や地位が脅かされる時は憐れなほどに怯え震える。救いようのない、あるいは殺す価値もないと思わせるような人間の屑でいい。最後まで、醜くも命乞いをして逃げ這い回るのをハムレットがあっけなく刺し殺す。クローディアスを殺す為に散々苦しみ抜いてきた全てが、まるで無駄であったかのような呆気無い最後、それがクローディアスには良く似合う。そして、その分だけ、クローディアスを殺した後のハムレットには虚しさしか残らないのである。

全てを失ったハムレットに残ったものはホレイショーという友であり、彼は最初から最後までハムレットに仕えた大事な存在である。その彼が黙ってハムレットだけを先に逝かせるわけがなく、それでもハムレットがホレイショーに生きることを命じて、ホレイショーがそれを承

諾する時は、見る者が堪え切れずに涙するぐらい悲痛なものでなくてはならない。人間の一番共感しやすい、感情の脆い部分を突くような演出が望ましい。特に、女性は男同士の熱い友情や、英雄めいたものが結構好きである。それを演出することが出来れば完璧だろう。